

| | |
|--------------|---|
| Title | 回想・思索・物語 : ユダヤ系アメリカ作家としてのソール・ペロ |
| Author(s) | 片淵, 悦久 |
| Citation | 大阪大学, 2007, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/47113 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。 |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

| | |
|------------|--|
| 氏名 | 片 瀬 悦 久 |
| 博士の専攻分野の名称 | 博 士 (文 学) |
| 学位記番号 | 第 20770 号 |
| 学位授与年月日 | 平成 19 年 1 月 22 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 2 項該当 |
| 学位論文名 | 回想・思索・物語ーユダヤ系アメリカ作家としてのソール・ベロー |
| 論文審査委員 | (主査) 教授 森岡 裕一 (副査) 教授 玉井 暲 教授 柏木 隆雄 助教授 服部 典之 |

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ソール・ベローの長編小説作品を、ユダヤ文学とアメリカ文学との接点という視点から考察し、その文学的想像力に対する新たな評価の可能性を追求する研究である。論文全体は序論、本論三章、結論、注、引用・参考文献から構成されており、総頁 A4 判で 234 頁、400 字詰め原稿用紙に換算して約 600 枚からなる論文である。

序論では、まず 20 世紀ユダヤ系文学およびベロー研究の歴史を概観したうえで、ベローのユダヤ系作家としての特質を探る考察がこれまで十分に掘り下げられていないことが、ベローおよびユダヤ系文学研究の停滞につながっていると主張する。論者は、ユダヤ文学の伝統を継承し、同時にアメリカ文学の発展にも新たな貢献をしていると思われるベロー文学の特質を、回想、思索、物語の三つのキーワードに集約し、個々の特質がもっとも明瞭に表現されている作品を読み解くことを本研究の中核におく。

第一章では、『宙ぶらりんの男』、『雨の王ヘンダソン』、『フンボルトの贈り物』を主として取り上げ、ベローの回想の物語がユダヤ人の集団的な記憶伝承のあり方に依拠したものであり、過去へ遡及する物語形式が民族的自己を再確認する物語内容を土台として支え、自己探求の主題を絶妙な形で表現することに成功している点を論証する。回想はひとつの物語形式ではありながら、同時にまた物語内容および主題そのものにもなっており、回想の行為自体のみならず記憶が甦らせる過去の出来事が重要視される。回想により再現される過去が現在を見つめ直すきっかけとなる時、それは精神的な自己回復と新たな自己確認の行為に等しいものとなる。

第二章では、『オーギー・マーチの冒険』、『ハーツォグ』、『学生部長の十二月』、『心の痛みで死ぬ人たち』を対象にして、過去を再現する物語形式としての回想における語りの側面を前景化させることがベローの思索小説の特質であると位置づけ、奔放な語りの方がはらむ反復や脱線の連続が形成する、語る主体あるいは思考する人物の物語に、ユダヤ文学の伝統である喜劇性と哀愁に満ちた語り口が息づいている点を検証する。ベロー小説における思索行為は、語り手あるいは思索をめぐらす作中人物の独特な語り口や、個性的な想像力によって周囲の世界を映し出す優れて言語的な行為であると見なすことができる。

第三章では、『犠牲者』、『この日をつかめ』、『サムラー氏の惑星』、『ベラローザ・コネクション』、『ラヴェルスタイン』を材料に、一定の主題的方向性を持った言語表現の全体像、物語の叙述の分析に焦点を当てている。これらの作品は、いずれも独自の関心の置き方と特徴的な物語言語によって、ユダヤの歴史そしてユダヤ人の自己に関する問題を掘り下げるベロー小説の「物語」的な諸特徴を顕著に示している点を明らかにする。ベローが回想性と思索性の双方を包摂した語り方を編み出し、それを駆使することによって、ユダヤ系作家がみずからのユダヤ性を判断するた

めの指標となる、ホロコーストやディアスポラなどの歴史的な主題を、いかに作品の主要な題材として取り入れ、またそこにどのような物語的な加工を施しているかを詳細に分析する。

結論では、ユダヤ系作家と規定されることに対する警戒感が、ユダヤ人であることの否定に全面的に直結するものではないことを、作品論の積み重ねにより論証した諸点をあらためて確認する。ベローは根源的なユダヤ性を遡及することを自己確認の本質的ありように単純に還元するのではなく、みずからの中にまだ残存するユダヤ的と形容せざるをえない特質が何であるのかを、ひとつひとつの作品を通じてつねに真摯に考えつづけていたのではないかと、またそれがアメリカ文学に対するロシア系ユダヤ移民第二世代作家ベローによる貢献の本質であったと言えるのではないかと結論づけ本論文を結んでいる。

論文審査の結果の要旨

本論文のベロー研究への最大の貢献は、ベローが依拠した主要な物語形式や、語り紡がれた物語内容が、みずからのユダヤ系作家としての存在意義に対し自覚的で敏感な反応を自然に示したものであり、それが同時にベロー独自の文学的想像力の形成に一役買っていたという点を明快に実証したことである。ユダヤ人の家系に生まれ、ユダヤ系移民の子としてタルムードを摂取しながら、同時にアメリカの教育も受け、最終的には英語で執筆するアメリカ作家として文壇にひとつの地位を築いたベローを、その異種混交的な文化的影響を考慮して、あえてユダヤ系アメリカ作家と呼ぶ論者の立場は首尾一貫し、その視点から主要な長編をほぼ網羅的に詳細に分析した本論文は緻密な読解に基づいた読みごたえのある優れた成果となっている。とりわけ、二十世紀後半に生きるアメリカのユダヤ人の置かれた特殊な状況にもとづく視点と想像力を駆使しつつ、きわめて主観的な色彩の濃い文体的特質によって、ベローがユダヤ文学とアメリカ文学を交錯させ、独自の文学形式を確立させた点が綿密に跡づけられており、本研究が、今後アメリカのユダヤ系文学を考えるうえで踏まえるべき重要な研究と位置づけられることは間違いないだろう。

ただし、本論文において問題点がまったくないわけではない。本論文が依拠するユダヤ文学の伝統なるものについての具体的な記述がほしかったし、回想・思想・物語という基本の枠組みがときとして重なり、定義に曖昧性が生じているように思えるところが散見される。また、丁寧な説明を試みようとする姿勢が、ときとして同義反復的なくどさを感じさせる点は残念である。

しかし、これらの点は本論文の優れた価値を損なうものでは決してない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。